

1. 教育の責任

- * 新しい命を育み家族を形成していく周産期にある母と児の身体的・心理的・社会的特性をふまえ、そのウェルネスの維持・増進のために必要な看護の知識・技術・態度を教授する。
- * 女性とその家族に関わる看護援助を、エビデンスに基づいて教授する。

2. 教育の理念

- * 国際看護学部の教育理念である多様性への理解と受容及び看護ができる看護教育の一翼を担っている。
- * 学生の自律性を重んじて、学生の学習する力を信じて待つことを大切にしている。
- * 教科書やその他の専門書より、写真や図を意識的に取り入れ視覚的に分かりやすい講義資料になるように心がけ、学生自身が教科書や資料を用いて学習しやすいように環境を整える。
- * 対象者と向き合い、講義や演習で得た知識を実習で活用して看護を展開できる力を育成できるよう努める。知識と実践を結びつけ、対話を通じて気づきを言語化できるよう行う。

3. 教育の方法

【教育の目的と目標】

2年次の「キャリアプランニングⅡ」では、さまざまな看護職の活動や役割、働き方を知る機会を通して、将来のキャリア形成に必要な力を身につけることを目的とする。学生が自己と向き合い、進路を主体的に考える時間を確保し、1年生との合同授業でのリーダーシップや少人数でのグループワーク、発表を通して養うことを目指す。2年次の「多様性とウィメンズヘルス」では、人間のセクシュアリティの生理的、社会的、国際的な特徴を教授できるよう学生の学習環境を整え、日本で暮らす外国人女性の健康について現状からどのような支援が必要なのか考察できるよう努めている。今年度より、3年次科目「母性看護援助論Ⅰ」の科目責任者を担当している。講義と演習を通じて、妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期に関する知識と看護実践技術を教授する。講義では、学んだ知識が「母性看護援助論Ⅱ」や「母性看護学実習」で活用できるように、各期の内容を整理しやすいよう配布資料を工夫し、講義でのスライドと配布資料をリンクさせて学生自身で復習しやすい環境を整えた。演習では知識を基に具体的な観察方法や、沐浴などの技術の注意点を意識して、実習で行うことを想定して行っている。「母性看護援助論Ⅱ」では、「母性看護援助論Ⅰ」の知識を基に、1組の母子の事例を用いてウェルネス志向の看護過程を展開できるよう、知識を用いてアセスメントし必要なケアを導きだせるよう支援している。「母性看護学実習」では、実際の対象への看護の展開ができるよう、学生がどのように考えてそのように展開しているのか、日々の行動計画や看護過程の記録、看護実践を通して、学生1人1人と対話を行い、学習活動が積み重なるようにしている。4年次の統合実習では、これまでの看護学の学びを活かし、対象への看護が自立して展開できるよう、また看護管理についてシャドーイングなどを通して体感し学びに結び付けている。また、エビデンスにもとづくケアを意識できるよう、文献を用いてカンファレンスを実施している。

【講義・演習・実習のつながり】

医療英語を学ぶ国際看護学部として、母性看護学領域の医療英語を用いる機会を多くするため、日本医学医療検定の単語の小テストを各コマで実施し、単語に触れる機会をもてるよう工夫している。講義では、単元に応じた最新の政府統計や国際機関刊行物、学術論文から引用した資料、これまでの経験（青年海外協力隊での活動経験や活動など）を活用し、学生の知的好奇心を喚起しつつ、母性看護学の最新動向を踏まえている。援助論では、周産期（妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期）のウェルネスに焦点をあてた看護実践が展開できる能力を、講義や演習などを通じて教授している。英語資料も活用し、国際看護学部の中の母性看護学領域として役割を担っている。実習と連動している「母性看護援助論Ⅱ」においては、適時に必要な技術演習を学内のみならず母性看護学実習施設の一部借りて行うことで実践的な技術の習得に役立つことや、カンファレンスによる振り返りも時機を逸せず行う。必要時には、専門性を持ったゲストスピーカーの実体験を聞くことで事象をより身近に感じ、コミュニケーションを十分に取ながら、看護について考えられるよう効果的に学外の教育リソースを活用している。実習で対象者と向き合うことで、講義や演習で得た知識が実感を伴う理解へと深まり、学生が「分かった」という感覚がもてるようになることを目指す。そのため、講義・演習・実習の一連のつながりを重視してい

ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：国際看護学部 名前：山内 こづえ 作成日：2025年12月15日

る。

4. 教育の成果

* 学生アンケートも平均を上回っており、学習満足度は高いと感じている。講義・演習・実習での発表姿勢や出席状況、指導者の評価もおおむね良好で、看護する必要性を理解し、周産期にある母と児への看護実践の知識・技術・態度の各面で学生達は順次育っていると言える状況である。

5. 改善への努力と今後の目標

- * 学生からの意見を取り入れ、講義資料作成に反映させる
- * 実習に関して、学生の学びを深めるため帯同し臨床現場での指導ができるよう、体調管理を十分に行う
- * 学生が成績評価方法を理解できるよう、授業内で伝える工夫を行う

【添付資料】

・シラバス（大学のホームページを参照）